

POLAND MONTHLY / BIULETYN POLSKI

1990年

3月号

(通巻96号)

400円

ポーランド月報

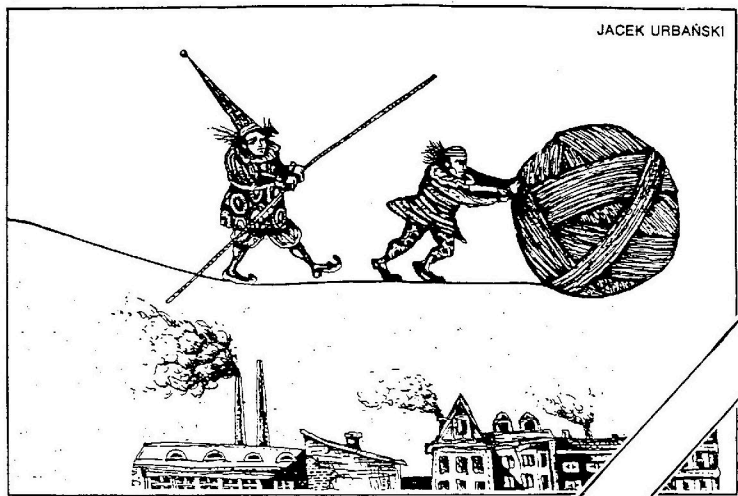
ヤルゼルスキ將軍、戒嚴令を語る

『週刊連帯』インタビュー

問題の核心は何か

ステファン・キシエレフスキ

JACEK URBAŃSKI



ヤルゼルスキ將軍、戒厳令を語る…………… 3

『ガゼタ・ヴィボルチャ』紙のインタビュー

問題の核心は何か——新しい「連帯」の時代を迎えて…………… 14

ステファン・キシレフスキ

ポーランド日誌 1989年11月9日～1990年1月11日…………… 2/21

ポーランド日誌

1989年11月9日～1990年1月11日

11月9日 コール西独首相ポーランド訪問。閣僚の約半数と産業界関係者多数が同行。マゾヴィエツキ首相と会談、経済問題を中心に討議。●夜、東独が西独国境開放。ベルリンの壁が“崩壊”する。

11月10日 コール首相、マゾヴィエツキ首相と2度目の会談でポーランド改革援助のため3年間に総額30億マルクの援助を約束。この後コール首相は予定を中断してボンへ戻り、東独情勢に対応。●スクビシェフスキ外相とゲンシャー西独外相、投資保護、文化・科学技術情報センター設置、環境保護面での協力、科学技術協力等をうたった協定に調印。●ニュゼビトフスカ報道官、東独の決定を歓迎しながらも両独統一への懸念を示す。

11月11日 コール首相、ポーランド訪問を再開。●第1次大戦後のポーランド独立記念日。マゾヴィエツキ首相はラジオ演説で、鉱山労働者に向け、生産増のため土曜も働いてくれるように要請。●英国外相、ポーランドへの改革援助のための経済使節団の派遣計画を発表。

11月12日 コール首相、ヤルゼルスキ大統領と会談。

11月13日 カナダ訪問中のワレサ委員長、議会演説でポーランド人が望んでいるのは融資よりビジネスのバ

ートナーになってくれることだと述べる。この後マルルーニー首相とも会談。●ワレサは次いで米国へ飛び、ホワイトハウスでブッシュ大統領から「自由メダル章」(民間人に与えられる最高の章)を贈られる。●前日の「土曜就業要請」に関し、「連帯」全国鉱業委員会はマゾヴィエツキ首相との早急な会見を求める。●ズウォティの公道レートが1ドル=3100へ切り下げ。

11月14日 コール首相、アウシュヴィッツ訪問。ワルシャワへ戻った後マゾヴィエツキ首相と会談、欧州の現在困境の不可侵、ポーランド国内のドイツ系住民の権利保護、経済援助計画を盛り込んだ共同宣言に調印。●統一労働者党、コール首相がラコフスキ第一書記との会見をキャンセルしたことを非難。●1989年10月末現在の貿易黒字は、昨年同期をかなり下回る5億7000万ドルとの報告。

11月15日 ワレサ、米議会上下両院合同会議で演説、東欧の自由と民主主義を守る新マーシャル・プランを訴える。米議会での外国民間人の演説は1824年のラフアイエット以来史上2人目。●マゾヴィエツキ首相、鉱山労働組合代表と会談。

11月16日 スクビシェフスキ外相はストラスブールのEC会議で演説、ドイツ人の民族自決権を尊重するが両独統一は全欧州的視野で考えるべきと語る。また、いずれはポーランドもECに加盟したい意向を表明。

●下院が恩赦法を可決。故意の犯罪で懲役2年以下、および過失犯罪で3年以下の者は刑の執行停止、それ

【21頁へ続く】

ヤルゼルスキ將軍、戒厳令を語る

『ガゼタ・ヴィボルチャ』紙のインタビュー

Martial Law Anniversary : An Interview with General Jaruzelski
Uncensored Poland News Bulletin No.1/90, 17 Jan. 1990, London

【編集部注】 「連帯」系日刊紙『ガゼタ・ヴィボルチャ』は、1981年12月13日の戒厳令施行から8周年の昨年12月にヤルゼルスキ大統領とインタビューを行い、12月18日付同紙に掲載した。聞き手は同紙編集長のアダム・ミフニクと編集員のヘレナ・ウチヴォ。周知のとおりヤルゼルスキは戒厳令を宣言した本人である。一方のミフニクは戒厳令と同時に拘禁されその後長く獄中にあったが、昨年6月の選挙では下院議員に当選、また昨年7月に「君たちの大統領 われわれの首相」と題する論文を書いて現体制への扉を開ききっかけを作った人物である。

【『ガゼタ・ヴィボルチャ』紙の緒言】

ポーランド戒厳令記念日にあたり、「連帯」系日刊紙『ガゼタ・ヴィボルチャ』は、現在のポーランド憲政上の元首にして国際的には「連帯」を鎮圧しようとした男として知られる人物を会談に迎えた。かくして、われわれの新聞は、われわれが長年闘いを挑んできた考え方、われわれにとって同意しがたい論拠に発言の場を提供したわけである。しかし、こうした論拠を知ることは必要であると信じる。われわれの追求してやまぬ民主主義と複数主義の本質とは、相反する考え方同士の話なのであるから。

グダンスク協定と「連帯」の闘い

問 1981年12月13日、現首相【マゾヴィエツキ】は拘禁され、現大統領【ヤルゼルスキ】は首相であり、そして拘禁の決定を下したのは救国軍事評議会議長に収まったこの首相自身であった。戒厳令施行8周年、今やあなたは『ガゼタ・ヴィボルチャ』のインタビューに応じている。これもまたポーランド史のユニークな性格の一例といえよう。ポーランド人は合意の精神と国に対する責任感とに基づいて他に例を見ない解決策を実現する

ことのできる国民だ、ということを外内印象づけた今回の状況の生みの親のひとりとして、どのようにお感じか？

ヤルゼルスキ それらの事実は歴史のパラドックスと考えられていようが、私個人としては、その中には歴史の論理を見て取ることができる。われわれすべては 少なくともわれわれのほとんどすべては——長い道のりをたどって、どちらの側もアイデンティティを奪われることなく、かつ同時に共同行動をとるチャンスが生み出されるような、そういうひとつの解決に至った。その道は歴史の袋小路を克服するための道のりだった。

問 ではその道のスタート地点に戻ってみよう。われわれ「連帯」の間はグダンスク協定調印の日から、ある印象を抱いていた。つまり政府当局はこの協定を、国を改革するための広範な構想の一部とはみなさず、民衆の反乱によって他の手段がとれずに仕方なく結んだものと考えている、という印象だ。それゆえにあなたは「連帯」を分裂させ、麻痺させ、鎮圧しようと努めた。それはたとえば「連帯」の法的登録の際のトラブル、「連帯」規約をめぐる問題、ヤン・ナロジニャク事件などによく現れている。

ヤルゼルスキ いろいろな人がいろいろなことを言う。1980年の夏の出来事の過程をまだ芽のうち

に摘みとろうという試みはまったく行われなかった。当時の当局はやろうとすればそれができたにもかかわらずだ。

問 しかし当局内部にも意見対立があった。
ヤルゼルスキ たしかにある種の幻想や誘惑はある。しかし、あの時はその過程をまたしても弾圧で止めることは不可能だとの考え方が最も多くの賛同を得た。

問 グダンスク協定には「組合は政党の役割を果たすつもりはない」との文言があったことを思い出してほしい。協定以後に起きたさまざまな事実は社会に深い懸念を生じさせかねないものであり、また事実懸念が生じたことを、あなたは認めなければならない。

ヤルゼルスキ われわれは相互不信の悪循環に陥ってしまった。つまり、お互いに相手方が悪意と敵意と悪だくみを持っており、自分たちの側を破壊させようとしていると考えてしまったのだ。偏見は偏見を生む。過激な姿勢が台頭し、極端な考え方が大きく育った。

問 現時点で、「連帯」法的登録時の危機状況やナロジニャク事件は強硬派の行動の所産だったと信じているのか？

ヤルゼルスキ あれはおそらく、事態の変化やそのスピードとスケールについて行けるほど成熟していなかったことから生じたものだ。あらゆることが極めて急速に起こり、すべてがあまりにも衝撃的だった。

問 われわれは「『連帯』は政党ではない」という文言を、「連帯」は国家権力を奪ったり行使したりする試みを行わないとの宣言であると解釈していた。私は、グダンスク協定にはひとつの弱さがあったと思う。つまり、独立した労働組合の結成への道を開いていながら、政治問題への関与を禁じたことで、必然的にあつれきを生じることとなった。しかし、あなたにはより一般的な質問をしたい。1980年8月は、一連の大きな危機の中のひとつだった。その前に1956年、68年、70年があ



ヤルゼルスキ大統領

った。われわれはそれらがすべて全体主義体制の黄昏を示すものだと理解していた。では、あなたは、国防相であり閣僚であり党指導部の一員であったあなたは、それらの危機をどのようなものと解釈していたか？

ヤルゼルスキ 私は、80年より前の諸危機をふりかえって評価したいとは思わない。80年の危機は複雑だった。それは経済的、政治的、道徳的、心理的な危機であった。あれほど強大なものになったのはそれゆえだ。ちょうど圧力鍋の中のスープのようなもので、蒸気の出口が塞がれているといずれフタが爆発する時が来る。しかしわれわれの側の一部の人々は、徐々に蒸気抜きをしながらフタを開けることができ、スープはそのままで残らだろうと信じていた。しかしフタを開けてみたら、スープは変化した。

権力の座にあるものなら、爆発の影響を最小限に押さえたいと思つて当然だ。そして同時に、君たちの運動の前には広い空間が開けた。今誰かを非難するのは難しい。権力の座にある者で、その権力を誰かと分かち合うことを嫌がらぬ者でないし、権力を取ろうと闘っている者の方は、できる限り早く権力を取りたいと考える。

実際のところ、1981年7月の第9回党大会の準備の過程、および党大会そのものに至ってはじめて、われわれはあることに気付いた（おそらくはそのいくらか前から気付き始めていたと思うが）。

それは、この状況が単なる表層的な変化ではないこと、独立した労働組合だけでなく、他の分野でも根底的な改革が必要なのであり、それらが体制の民主化をもたらすであろうこと——もちろんわれわれの想像力で許容しうる範囲内の、かつ状況の許す範囲内での枠組みの中で——だった。

われわれの世界観は徐々に変わっていった。われわれは今では世界を違ったふうに見ている。しかしここまで来るには時間が必要だった。私は「頭をガンとやる」必要があった。われわれ皆そうだった。

特に例を捜すまでもない。例えば、長年にわたって君（ミフニク）は私にとって——また他の人にとっても——とりわけ悪魔的な人間だった。私にとっては、君のイメージは悪魔よりなお悪かった。

時々、私についてこんなふうに言う声か咽かれる。「なんてナンセンスなんだ、彼は『連帯』を潰し、それから『連帯』が権力を取る状況をもたらした」。こんなことを言う人間は、現実についても弁証法についてもよく知らないのだ。

繰り返して言おう。赤い市電が複数主義という名の停留所に来たとき、私はその市電を見捨てなかった。いろいろな色の複数の市電を走らせよう。それらの市電を、「よりよい民主的なポーランド」というひとつの目的地へ向けて走らせよう。そして私は市電同士の衝突を避けるためなら何でもするつもりだ。

首相への就任

問 いったいどういういきさつであなたは首相になったのか？ 結局のところあなたは軍人だ。そのうえ、あなたの履歴も非常に不可思議だ。あなたの戦歴については誰もよく知らなかったし、あなたがソ連に強制移住させられた経緯のあること、父上がクラスノヤルスク地域の収容所に入れられており、釈放後まもなく亡くなったことも誰も知らなかった。政治の表舞台に登場したのは1981年になってからだ。

ヤルゼルスキ 短いインタビューの中では答えようがない。緊張が高まっていた。ピンコフスキ政



二ノ川 編集長

府はもはや状況をコントロールできなくなっていた。スタニスワフ・カニア（当時の第一書記）が私に首相になるよう要請した。私は引き受けたくはなかったが、2つの条件をつけて同意した。ひとつは、当時副首相だったヤギエルスキを一種の職務上のマネージャー的存在にすること（私は自分がこの分野では経験不足なのを自覚していた）、ミエチスワフ・ラコフスキを副首相にすることだ。私は、自分が首相の座についたことは一般的には強硬派路線の宣言として映るだろうと考えた。それゆえに私は、私が実際には調停役であることを示したいと思った。そして当時のラコフスキは「連帯」に好意的な論調の「汝のパートナーを尊敬せよ」という有名な論文を書いており、民主主義者で改革派であるとみなされていた。

問 しかしその後彼は違う見解を表明した。「連帯」からすれば、彼は民主主義者ではなかった。ヤルゼルスキ 君たちは、軍が公的生活に関与することを危険だと考えなかったか？ 規律と階級は軍隊生活の一部だ。複数主義と妥協は公的生活の一部だ。

最初は、軍ではなく軍人政治家が問題だった。うぬぼれと取られたくないが（私はバランス感覚の持ち主なので）、何にせよ、政権を担当した軍人にはドゴールやアイゼンハワーやその他の多数の先例があった。社会の信頼を失っていない軍隊

という形の支持基盤によって、いくらかのチャンスが与えられた。わが軍が何の政治的野望も持っていないなかったことはここで念を押したい。12月13日に〔戒厳令の〕宣言をしたときも、軍は義務を果たした後は兵舎に戻った。

深まる対立

問 当時の軍の役割に関してはわれわれ双方の評価に食い違いがあるのは確かだ。ところであなたほどのように時のソ連指導部との関係を結び発展させていったのか？ レオニード・ブレジネフはどんな男だったか？ 彼と話すのは気楽なことだったか？

ヤルゼルスキ 誰かを盾にしてわが身を守るのは私のやり方ではない。特にその誰かが物故者の時はなおさらだ。無邪気で時代遅れに見えるかもしれないが、私は当時の自分が殊勝なことを言ったり行ったりしていたとの印象を与えたいとは思っていない。ただ、主に外からの圧力があり、その力が私に屈服を強いた。われわれは皆、ある種の自己分析をするように生まれついているのかもし

れない——私はずっとそれをしてきた。あれは私の人生で最も劇的な決定だった。私は生きているかぎりあれを思い出しつづけるだろう。

初めに、君たちのしたこととわれわれのしたことすべてを話し、それから、内的・外的両方のいわゆる客観的要素を捜した方がよからう。

〔グダンスク協定後〕1年半のうちに、国民生産は20%近くも落ち込んだ。81年の冬の到来をわれわれがいかに恐れていたか、皆が覚えている。81年12月初め、ロイター通信の特派員は「この冬を生き延びられないポーランド国民がいったいどれほどいることか。われわれにできるのはその数の多寡を論じることだけである」と書き送っている。石炭の増産を訴えたわれわれの呼びかけは実を結ばなかった。最近『ガゼタ・ウィボルチャ』に「もしもこの冬が厳冬であれば、町は死に瀕するだろう、1トンでも多くの石炭を求めるような状況にわれわれは追い込まれている」と書いてあるのを読んだとき、私はあの時のことを思い出さずにはいられなかった。ポーランド人は同じ台詞を聞いた覚えがあるはずだ。それは今とは別の人間の口から語られ、政治状況も違っていたが、言



戒厳令下、デモ隊を解散させようと放水する警官隊

っていることは同じだった。

当時西側はポーランドに拍手を送っていた。しかしわが国の対西側貿易は急速な落ち込みを見せていた。なぜなら西側商人たちは、もっと騒乱のない平和な国、利益が保証されている国の方へ引かれて行ったからだ。

こうして、ポーランドは破滅寸前になった。これは当局だけの悩みではなかった。それに加え、「連帯」のあらゆる種類のレトリック、さまざまな行き過ぎた行為、政府を孤立させる分断策、当局と闘うという精神的なゆがみ、脅威意識、(テモ群衆で埋まったワルシャワの)広場、消防大学〔の占拠スト〕、などがあった。ルブリンでは学校の児童までがストをした。

問 あれは教師のストだ。教師たちは独自のカリキュラムで教えていた。

ヤルゼルスキ いずれにしろ、学校のストライキだった。

毎日毎日私のところへは、ストライキや際限のない要求を伝えるテレックスが山ほど運ばれて来た。副首相や大臣たちは火消しのように全国を飛び回った。どんなに多くの種類の言葉でストライキが言いつぶされたか、覚えていだろう。いわゆる通常スト、いわゆる労働者による工場管理スト、同情スト、警告スト、ローリング・スト、脈動スト、抗議スト……。

戒厳令への道

政府当局や教会が穏健なふるまいを呼びかけたのはゆえなくしてのことではなかった。「連帯」内では急進分子が優勢になった。例えば「連帯」委員長選挙でのワレサの得票率は55%で、ユルチク、ルレフスキ、グヴィアズダといったその他の急進的候補が40%を取った。これはゆゆしきことだった。ワレサは自伝の中で、ラドム会議では自身のそれまでの穏健な姿勢を捨てて急進派として発言した、そうしなければ各地域の支持を得られなかったからだと書いている。あれほどの政治的本能を持ったあれほど強い男にしてなお、時の潮流に従うしかなかった、さもなくば敗北していた

ろうことを認めている。今はなき風刺家のレッタならば、「時には鐘の方が鳴鐘人を振る」と言うだろう。

もちろん、当時は誰もがあらゆることを悪魔的に描いた。ある程度までわれわれは情報に振り回されていた。君たちは自制し選択することができてしかるべきだった。しかしあのような困難な時期に選択するのは極めて難しいことだ。

事態の進展を食い止めようとの試みは、81年秋に創設しようとした国民合意戦線も含め、すべて失敗した。このようにして事件は積み重なってゆき、断ち切るほかない結び目が出来てしまった。

問 なぜあなたはわれわれの「自主管理共和国」という概念を好まなかったのか？

ヤルゼルスキ われわれはそれを、すべての者が統治し始める無政府状態へ至る道と考えた。しかし、後になって自主管理のアイデアの多くは良いものだと思いついたことを告白しなければならない。だが現在の状況はどうだ。どうしてだか、労働者自主管理の賛美はめったに聞かれない。昨今の流行は私有化のようだ。かつて私有化を掲げて行われたストライキなどひとつもなかったと思うが。

1981年秋、われわれは政府に非常大権を付与する法案と、冬の間のスト禁止法案を国会に提出した。しかし、ゼネストの脅しやその他の抗議にあり、戒厳令のほかに道がまったく——もしくはほとんどまったく——なくなった。あれはわれわれ双方の共通の失敗だった。われわれの目標はただひとつ、その失敗が国民的悲劇になるのを防ぐことだけだった。

問 ワレサなら、12月12日には学生たちのストを除けばストライキはひとつもなかった、と返答するだろう。

ヤルゼルスキ 12日にストがなかったとしても、14日と15日にはあった。

問 私が言ったのは、当時のポーランドは混乱状態に陥ってはならず、反抗的な反対派勢力が共産主義者の虐殺を望んでいるといった危険もなかっ

たという意味だ。ラコフスキは当時、譲歩の限界を超えたと言った。しかし私の考えでは、そもそも問題だったのは譲歩などではなく、どうやって当時の政治体制に適切な紛争解決装置をもうけたらよいか、という点だった。

ヤルゼルスキ そうした紛争解決装置がなかったために、実際に行動に移されることこそなかったが、過激なレトリックが伸長した。ストライキを伝えるテレックスが多数届いていたが、ストライキに至りかねない非常事態の数は実際のストの少なくとも10倍あった。人々はどうしてよいかわからなくなると非常事態を宣言してテレックスを送る、しかしそれはストとは相当に離れた状態なのだ。

「連帯」は暴力を使わないことを信条としており、実際に暴力に訴えなかった。それゆえにわれわれの側も非常につらい思いだった。

意識的に暴力に訴えたということではなく、すべての政治勢力が、国で起きつつある事態の進展をコントロールする力を急速に失っていったのだ（この点を私は強調したい）。君たち「連帯」の側でも、国の当局が機能しなくなったことを感じ

ていただろう。この状況はハッシュェのように作用した。何も怖くはない、自制の必要などまったくない、と。そしてわれわれはぐずぐずしはしなかった。戒厳令の警告を含め、訴えかけや警告が絶え間なく発された。

「連帯」のラドム会議〔急進的発言が主流を占めた〕を別とすれば、〔戒厳令の〕決定を促したもうひとつの要因は12月17日にワルシャワで予定されていた大規模デモだった。あのような緊張の高まった状況の中で、あのような（70年12月事件の）記念日に、そのような大規模デモが行われるということが何を意味するか、言うまでもなからう。私は誰かが悪いとか、誰かが犯罪的な意図を持っていたとか言っているのではない、しかし君たちも承知のようにボズナンでもブダベストでも事件は起こった……。

問 あなたは「連帯」の脅威についてのみ話されたが、他の方面からも攻撃されていたはずだ。

ヤルゼルスキ それは党のことを言っているのか？ こうしたテーマはむしろ『トリブナルド』〔党機関紙〕で論じたいね。それに、当時起きた



戒厳令下、拘留中の「連帯」指導者。左からルレフスキ、クーロン、オニシキェヴィチ。

ことのすべてを党全体の非に帰することはしたくない。特に今日のような姿になった党——つまり、円卓会議を提唱し、現在の変化を作り出す作業の共同従事者となった党には。

問 あなたはリベラルな將軍と見られていた。
ヤルゼルスキ そう。それで多くの人びとは私が長く待ち過ぎると文句を言い、私は彼らを失望させた。

1981年の第11回党中央委総会で政策の根本的な変更と主導権の放棄を求める人びとが多かった。これはその後でもあった。われわれの政策は支持を失いつつあった。多くの人びとにとってわれわれの政策は譲歩、後退、降伏であり、主導権などどこにもなかった。

党員や軍人、警察官らの声も耳に届いていた。一だれその子供が学校でいじめられた、だれその妻が脅迫された、あるいは、だれその家のドアに絞首台の落書きがされた、ある管理職は手押車に乗せられて工場から運び出された、などなど。今になれば君らはこれらを無責任なはずらだったと言えるかもしれない。おそらくこうしたことは、一般化されがちなくある事件なのだろう——今日、彼に起きたことは、明日は他の人に起きる、というような。それにひきかえ、ビドゴシチは不幸だった、そこではまったく取るに足りないことがすべての始まりだった。それにルボゴラも……。

問 それはお得意の「連帯」による破壊的行動の好例というわけだ。しかしそれは管理者側の頑固な挑発が原因で、彼の行動を支えていたのは当局であり、それらこそ非難されるべきだ。

ヤルゼルスキ そんな議論をする必要はない。対立感情がますます激しくなっていた。オトヴォツクの警察署そばでの事件についてはどう思う？

警察を相手にけんかするなんて馬鹿気ている、そうだろう。警察の義務は市民の安全を凶ることなのだ。

問 反社会主義勢力が暴徒から警察官を守ったのだ。



ヤルゼルスキ しかし彼らはこれら事件の背景になる社会の雰囲気を作った者でもある。

私は本当に私自身に対して他の人びとに対しても正直であろうと思っているが、戒厳令が間違っていたとは言えない。あれは悪だった、しかしあれが無ければ起こったであろう悪よりはましな悪だった。

国内状況についてはどうだったのか？ これは何よりもまず、冷戦が復活しかけていたという背景を考慮に入れて考えるべきだ。当時、ソ米関係は悪化していた。レーガンはこうした場面に例の強力な説得力と政策を携えて現われ、彼の手にはヨーロッパ配備ミサイルまであった。一方、こちら側にはブレジネフがいて、アフガニスタンがあり、口を開きさえすれば「ニュート」ばかりという「旧思考」があった。さて、今度はポーランドの番だ。このヨーロッパの地図の重要な場所がだしめけに脱走を試みる。

いろいろな話が持ちこまれた。首相の私はポーランド駐留ソ連軍代表の訪問を受け、ソ連軍人とその家族に対する攻撃、ソ連人墓地や記念碑の冒瀆、その他さまざまな小競り合いについて抗議された。どうか理解してほしいのだが、これらのことについて敏感なのはなにもポーランド人だけではないのだ。ポーランドには60万のソ連人の遺骨が埋められている。そのひとりひとりに親、兄弟、姉妹、家族、友人がいる。われわれは彼らの気持

も理解しなければならない。

本当に事態が切迫したのは、ポーランド駐留ソ連軍がわが国の状況に対する不満を爆発させた時だった。無数の新聞記事があった。そこにはありとあらゆる警告その他の論評が付いていた。

1981年の9月か10月のことだった、ソ連大使がやって来て正式な抗議文書が手渡された。それはさらに切迫した内容の警告で、その根拠となっていたのはわが国の国境を保障している同盟関係だった。

ところで、君は私が今ここですべてを回顧すべきだということか？

問 人はすべての真実を思い出し、語るべきだと私は考える。

ヤルゼルスキ どの国にも30年たたないと人の目に触れない公文書というものがある。今日、何よりも重要なのは、われわれにはベレストロイカがあり、ゴルバチョフがいるということだ。

「責任は引き受ける」

しかし、国内問題に話を戻そう。大義のために何かいちはん重要なのか。われわれにとってそれは、当局が身動きのとれない混沌をつくり出しはしなかったこと、また「連帯」もあのような力と支持を得ていたにもかかわらず自制心を発揮したことだと言える。われわれはこれらの事実からなんらかの力を引き出すべきだ。

私は物事を同時に肯定と否定の両面から見ていた。これは、劇の登場人物のひとりとして、それも重要な役割を割当てられている者として当然の見方であり、私には他の見方はできなかった。今日、私は物事をより遠くから、より深くより広い観点から見ている。私はその両面での責任の範囲を広げたいと思う。言いのかれではない。圧政者と圧制されている者の感情の違いは理解している。ヴェク炭坑の悲劇。あそこにはまた違った痛ましい事件があった。私はそれらの多くについて責任を引き受けるつもりだ。

われわれには処理しかねた。それに、留置者が膨大な数にならないようにすることも、明々白々



な馬鹿者どもが事件を起こさないようにすることも不可能だった。時には留置がいろいろな意趣返しとなった場合もあった。今、私はツイヴィンスカやクッツ、その他の人たちに対して恥かしい気がする。

1982年2月の第7回中央委総会の時、私は「復讐や仕返しをしようとする低劣な欲求」はわれわれと無縁だと言った。そのすこしあと、第12回総会で私は警告した。官僚たちとほら吹きたちはこの災害に対して多大な責任がある、彼らこそが社会と当局の間に分断を持ちこみ、われわれを「連う車」に乗せようとしたのだと。そして不幸なことにいくつかはその通りになった。これは平和と秩序の復興のために開くべきだった雨傘の副次効果だ。その雨傘の陰に隠れた人びとの何人かはそこに留りつづけるべきではない。私自身のことにもっと早くもっと明確に気づかなかったという責めを負うべきだ。

しかし、その一方でわれわれは現実を次のように見ていた——反対側はわれわれがイニシアチブを取ることを嫌って西側の経済制裁を支持し、街頭での秩序破壊、投石、中傷を組織している……。しかしこうした歴史とは別れを告げよう。もっとも重要なのはわれわれがこのことから今日のために引き出し得た結論なのだ。われわれは合意書と円卓会議の精神を失ってはならない。

問 ビドゴシチの件に戻ろう。ご存知のとおり、挑発説がある。まず単庁での行動。次にビドゴシチ上空に飛行機を飛ばし、ルレフスキは自分で自分を傷つけたのだ、それに彼の父はドイツ系だというピラを撒く。

ヤルゼルスキ 細部には踏みこみたくない。とにかく、そもその始まりはルレフスキが衆議会の建物を占拠したことだという事実は思い出すべきだ。

問 彼らはただ声明を読みあげただけだし、議員代表のグループは彼らにそのまま留るように言った。あなたはあの時、誰かがあなたに対して汚ないトリックを仕掛けようとしているような印象を持ったのか？

ヤルゼルスキ いや、私はそうは思わなかった、しかし事件が私を傷つけることを狙ったものだという気がした。誰かがわざと計画したとの証拠はなかった。ここでポピエウシコ神父の死のことを考えてみたい。あれは誰に対して企まれたものなのか？ 教会!? それとも私か、キシチャクか、われわれの路線に対してなのか!? ビオトロフスキは聖職者と教会に対して当局は寛容だった、だからあのように行動する以外になかったのだ、と言った。彼らの行動はわれわれの政策を公然と否定するものだった。そしてこの否定はそれほど突出したものではなかった。

1981年12月から2、3年たったあとでもなお、わが国は周辺諸国のなかで離れ小島だった。同盟諸国との協議と言っても、戒厳令施行後でもなお協議などまったく容易ではなかった。なぜ戒厳令があんなに緩やかなのか、なぜ効果がでないのか、等々、同盟諸国から私は責められた。

いちばんよく私を理解してくれたのがヤノシュ・カデルだった。彼はポーランドに対してわりあい理性的で穏やかな態度をとって味方してくれた。彼の力は、もちろん、限界があった、しかしカデルの名は友人として私の記憶に将来もずっと残るだろう。

しかしいずれにせよ、私はこのことを長々と論じたくない。私が圧力を受けていたという解釈は腹に据えかねる。私はひとりの政治家であり軍人

である、それなりの責任感をもって決定し実行したのだ。

ソ連の干渉？

問 あなたが首相の資格でソ連指導者と最初に会談したのはいつか？

ヤルゼルスキ 1980年12月、モスクワでのことだ。しかしその時は首相ではなかった。スタニスワフ・カニアとユゼフ・ピンコフスキ、その他に何人かが一緒だった。

非常に厳しい交渉だった。明確な言葉が交わされた。ポーランドの状況は全社会主義国家を脅かしており、このことが同盟国としてのポーランドの安定性と信頼性の土台をむしばんでいる、この状態を終わらせなければならぬとわれわれは言われた。カニアは、いや代表団の全員が、実際、立派に振舞った。

問 しかし彼らはその状況をいかに終わらせるかの話をしたのでは？ かつてのハンガリーやチェコスロヴァキアでのやり方が提示されたのではないのか？

ヤルゼルスキ 思い出せない、しかしそれについても間接的な話があったと思う。

当時のソ連指導者層の年齢の影響を見逃してはならない。彼らに理解させるのは困難だった。われわれがメッセージを彼らに伝えようとした努力は実際、感謝されてしかるべきことだ。すべてがもっと悪い方向へ動きかねなかったのだから。

問 戒厳令の準備に数カ月を要した。その間ずっとあなたは事の重要性を十分に理解していたのだろうか？

ヤルゼルスキ 準備？ それには何も大騒ぎするようなことはなかった。どの国にも非常事態や戒厳令を想定した計画はある。そうした計画は定期的に手直しされる。われわれにもそういう計画はあった。今でもある。それらの計画はまた、今回あらたに編成された国家国防会議によっても手直しを受けている。

問 たぶんそうだろう。しかしあの当時、外国の代表がその計画の重要な役割を果たしていた。あなたはポーランドにいた東独の軍隊の使用についてソ連指導者に承認を与えたのか？

ヤルゼルスキ 演習の計画ができていた。ああした特別な時期に演習を実施するからには非常に強く人の目を惹かずに済まないという理由で、私は東独軍参加の意見に反対した。—そのことにポーランド人がいかに強く反発するかだけは誰もが知っていた。しかし詳しい話はやめよう。重要なのはあの演習は実施されなかったということだ。

問 それでは、ソ連の同志たちがあなたとスタニスワフ・カニアに対して個人的な警告として送ってきた手紙のことはどうか？

ヤルゼルスキ ほとんどのポーランド人があの手紙を悪らつな干渉と解釈している。グラブスキの広く知れ渡った行動もあった。彼はあの手紙に関係のある党指導部組織の改革を要求した。あれは中央委員会に深刻な反目をもたらした。その膠着状態をついに破ったのは何人かの軍人がとった態度、とりわけ、決定的だったのがウルバノヴィチ

將軍の態度だった。この有名な古参兵は演壇に登ると全員に向かい、今まさに何をなすべきかを理解させようと情熱的な訴えをした。今でもその姿をまざまざと思い起こせる。

問 チェコスロヴァキアについてはどう考えていたか？

ヤルゼルスキ すべてを考慮すべきだったのだろうが、私は特にそのことは考えなかった。

問 1981年の後半にはソ連の大使がしばしばあなたを訪ねた。

ヤルゼルスキ よくやって来た。

問 正確にはどういう用件だったのか？

ヤルゼルスキ 今では明白であり、理解できるのだが、彼らは真底から心配しているという気持を隠そうとしなかった。何はともあれ、彼らはポーランドに対して大規模な経済援助をしていたのだから。

君の質問ぶりを聞いてみると、ソ連の指導者たちは、地団太を踏みながら、すきあらばポーラン



ドを侵略してやろうとうずうずしているように見える。しかしそれは彼らにとって最後の手段だ。実際に彼らが望んだのは、騒ぎなくすべてがうまくまとまり、すべてがきちんと整理されて落ち着き、そうして「古き良き時代」が復活し、ひょっとしてある種ポーランド的な仕上げが施されるといいということだったのだ。

問 將軍、あなたはこの広大な国土をご存知だ。あなたの国民が、40年前あなたが迷われたあの場所に追放されるかもしれないという不安はあなたにはなかったのか？

ヤルゼルスキ 強制移住はスターリンの時代だ、時代錯誤はやめよう。

問 ハンガリー人は強制移住させられた。1956年のことだ。同じ年、ポーランド人は社会主義の枠内で主権を確立しようとした、これらはあなたの判断規準に入っていないのか？

ヤルゼルスキ 違う、その2つは同じ時代ではない、たしかに、私がわが国のことよりもハンガリー事件の方に重きを置いていることは認めざるをえないが。

民主主義の体制をめざして

問 よくある見解だが——もっとも「連帯」内部では違うが——戒厳令は国家首脳にとって古い形式を打破し、経済を根底から変える好機だったと言われる。あなたはその好機がむぎむぎ見逃されたと思うか？

ヤルゼルスキ 私は私が受身であったとは思っていないし、われわれが公平な分配を行ってきたと信じている。われわれは経済改革をはじめ、多くの活動の先鞭をつけた、ただ、経験もなかったし、その後の成熟した改革のような改革を行うには時期を得ていなかった。

問 正確にはいつ当局は、「連帯」が交渉に乗ってくるに違いないと判断したのか？

ヤルゼルスキ それは突然の啓示とか降伏ではなく、よく考えたうえでの直正な決定だった。教会

の役割はとりわけ貴重だった。統一労働者党第10回大会のすぐあと、さまざまな議論が始った、たとえばチレクとステルマホフスキの間の議論はある意味で基礎調査だった。「社会主義者の多元主義」とか「改革賛成派の合同」とか、後には、「建設的反対派」といった言葉が現れ、それは徐々に進んだ。そしてストライキが起った。

ゴルバチョフはこう言った——「われわれはイデオロギーや階級、政治の対立を、われわれが生き残らねばならない現実にとって二次的なものとして扱う。平和は維持しなければならない、そして文明化に伴う危険は克服しなければならない」。同感だ、われわれは成長し、党の指導的役割、党による支配を国家存在の基本問題より上位に置くべきではないことを理解すべきだった。そこから、今日、広範な連合政府の支持がわれわれの時代の要請であるという結論に達した。

もちろん、われわれは「あとと野となれ、山となれ」とは考えなかった。われわれは単純に、はるかに広範な社会勢力が政治の場に参入してくるに違いないと信じていた。そこから出たのがPRONや顧問会議の背景となった構想であり、それらは積極的な役割を果たした。しかしこれは「連帯」に比べ、その主体性においても、精神においても非現実的であることが明らかになった。

簡単に言えばこうなる。1981年12月以前の「連帯」は当局の力を過小評価していた、そして1981年12月以降の当局は「連帯」の力を過小評価していた。

問 全体主義体制はわれわれの目の前で終末を迎えつつある。この事態が変わりうると思うか？

ヤルゼルスキ 全体主義体制かどうかについての議論を始めればきりがないだろうし、しかもそれはここでの主題ではない。修正や手直しはありうる、しかしもはや後戻りはない。

問 ということは、われわれの行く先は民主主義体制だと？

ヤルゼルスキ 間違いなくそうだ！

【訳：高橋 初子／篠崎 誠一】

問題の核心は何か

——新しい「連帯」の時代を迎えて——

ステファン・キシエレフスキ

O co właściwie chodzi? Stefan Kisielewski
"Tygodnik Solidarność", nr.46, 28 lipca 1989

【編集部注】 筆者は1911年生れの音楽家にして作家。長くカトリック系週刊紙『ティゴドニク・ポフシェフヌイ』に寄稿。1957～65年の間、国会議員。本論文は『週刊連帯』第46号、1989年7月28日付、に掲載された。一部省略を加えて紹介する。〔訳：松井 洋〕

今日のポーランド情勢は錯綜していて、予測しなかった内政の方向転換のおかげで、ある人々にとってはまったく謎めいた奇怪なものに見える。本論ではそれをできるかぎり簡潔に説明してみたい。すなわちポーランド情勢と、そこから生じたポーランドの任務や志向、それをヨーロッパと世界の情勢の中で、またソ連と、いわゆる東側ブロック全体で起きていることの中で見てみよう。

前提に立ち帰って、きわめて単純で、まさにボスター的な主張を思い出してみよう。戦後何十年もの間、ポーランドの状況はそれらの周りを回っているのだ。そうした命題は2つになるだろう。

1) 第2次世界大戦と、ヤルタにおける西側列強の妥協的でナイーブな政策の結果、ポーランドは国家主権を喪失し、新たにロシアによって組織された領域に移行して、時とともに政治的にも軍事的にも、ワルシャワ条約に完全に従属した、飼ひ馴らされた一員となった。

2) この事態の帰結および条件として、ポーランドにマルクス主義が押しつけられた。それは今日現実的社會主義と呼ばれていて、はじめは自称党官僚中央部によって方向づけられた全体主義的計画に沿った社会と経済投資のシステム全体の改造を基盤としている。

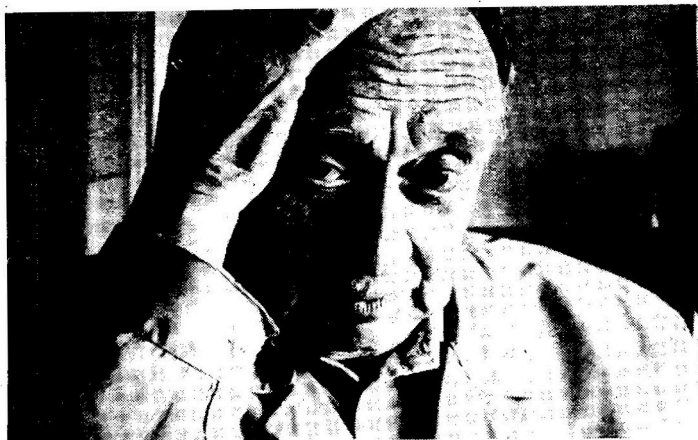
これが、第2次世界大戦後の新生ポーランド、かなり風変わりな文法的にもしっくりこないポーランド人民共和国という名称で呼ばれている新生ポーランドが受け継いだ2つの瘤である。しかし

ながらどのようなものであれポーランドは、何世紀にもわたる歴史的な伝統も抹消してしまう新たな国境線の中で、ヨーロッパと世界の諸関係の新たな配置の中で、ともかくも国家として存在すべきであり、存在せねばならない。これが筆者の、ドグマを超えたドグマである。ところでこの国家組織が存在すべきであり、また今後も存続するであろうからには、瘤があるよりは、まともな背中になるように、できるだけ背筋を伸ばしたほうがいい。そこで、第2次大戦の時に生じた2つの瘤を、捨てるか治す方法を考えてみよう。

第1の瘤——主権の欠如

ここではむろんどのような主権なのか、という問いが生じる。制度的な、社会経済的、内政的主権について言うならば、そもそも議論の余地はない。それはいかなる地政学的配置の1機能ではあってはならず、取り戻さねばならない。それにこの問題に関しては第2点で述べることにする。さしあたりは、どのような主権が問題となっているのか、という問いに答えるべく努めてみよう。

ここで私が述べているのは一般原則に依拠した自明の理である。つまりわれわれは、ポーランド国家が、どのような形であれ、最大限に自立して、自活能力とヨーロッパにおける役割を担う力を持った、恒久的な形態として存在することを望んでいるのだ。分割や領土と民族の変更はもういやというほど体験してきた。必要なのは、根柢づけられ、認知された安定なのだ。この前提に立って判断すると、両大戦間期の第2共和制時代に奇跡的に所有できたような、外交や軍事面での完全な主権というものは、今日のポーランドにとってはまるでありえない。



ステファン・キシエリフスキ

ロシアで前代未聞の出来事が起こっている今日、赤軍がアフガニスタンから撤退し、〔……〕〔1981年7月31日施行の出版興行統制法第3条第2項により削除〕バルト諸国が反乱を起こし、グルジアやアルメニア、アゼルバイジャン、モルダビア、カザフスタンでは公然の運動があからさまに民族的自由を要求し、白ロシアとウクライナが目覚めつつある今日、ポーランドにはこう発言する連中がいる——「ついに大国が崩壊しつつある。ブロックが解散する時代、独立ポーランドの、まさに外交政策において完全に主権を有する独立ポーランドの時代の到来だ。」

たとえば夢想家で頑固なビウスツキ主義者であるレシェク・モチュルスキの独立ポーランド同盟(KPN)がこの見解であるが、いっぽう「ネオ国民民主党派」は当惑ぎみに沈黙している。モスクワはほんとうに倒れかかっている、あらゆる同盟とか忠誠はもう無効なのだろうか？ ゴルバチョフ自身が実際にレーガンのテーゼを裏付けて、スターリニズムは「悪の帝国」であったと認めたのなら、いったい誰と合意を締結したらいいのか？ しかるに職業的悲観主義者、ヘシミスト、最小

限要求主義者、冷ややかに眺めることを好む私は、この瞬間にまったく異なった考え、予想、懸念を抱いている。私が心配しているのは、ある人々にとっては夢にまで見た独立回復のチャンスである東側全体の分散の中で、われわれがまだ所有している唯一のものである戦後のポーランド国家、すなわち、私もいくどとなく批判してきた文法的に正確とはいえないポーランド人民共和国も、散らばってしまうかもしれない、ということなのだ。

多年にわたるディレッタント的で、独裁的で、社会の目から隠された荒廃した経済政策のゆえに、内部からの崩壊だつてありうるし、周囲の国々でのさまざまな地政学的変化や心理的变化のせいで、外部からも崩壊しうる。それらの変化はわが国のますますかばそくなっていく国民構造を脅かしうるのだ。

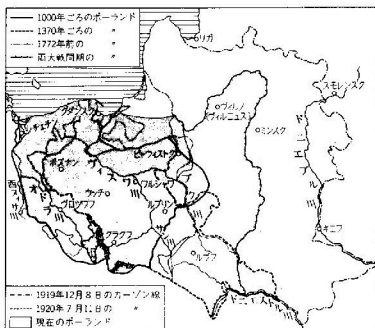
戦後の長い数十年を通じて、なにかしら起こっていたにもかかわらず、ポーランドには次のように言う人がいた——「どうだっていい。共産主義でも、テロルでも、スターリニズムでも、ばかげた共産主義的寡頭政治の独裁でも、経済の不条理でも。しかしそのおかげで、ブク川からオドラ川

までのポーランドは、何世紀かぶりに初めて、地政学的・民族的に健全な構造を有し、ロシアとドイツの間で踊る必要がなくなった。また、バルト海沿岸地域と原料、農業、港、さらに船舶が航行可能な河川までも有する国土状況は、教条的な管理ではなく、適切な経験に基づいて管理されるならば、経済的に希望的観測を下すことができる。

このような声はしばしば、「民族的」ないし「ネオ国民民主党的」グループ（彼らだけというのではないが）からあがっていた。事実ピウスツキの連邦構想からは今日何も残らず、人民ポーランドは、領土的には反ゲルマンで構想的には親ロシアの「初期の」ドモフスキ構想に近い（もっとも、地政学を凝視していた彼は、帝政ロシアからマルクス主義的ソビエト連邦への変化は評価しそこなかったか）。私自身、体制に対して政治的・経済的反対派活動を行ってはいいたが、共産主義を超越して続く揺るぎないポーランドの新たな歴史の状況の肯定面を探る方向に傾いていた。ところが今は反対に、そういう風には考えられず、わがブロックの激動と変化こそ、それまで最低限とはいえ戦後ポーランドの国家としての安定を形成していた構成要素を害することになるかもしれない、という思いに時々おそわられている。

なぜか？ 何よりもまず、ソ連のテロルを恐れてひっそりと沈黙していた数十年の後に、東側ブロックのすべての国々で、ロシアの支配下にある東欧諸国間の国境と関係を規定しているヤルタ体制が、スターリンの産物だったのだという歴史意識と記憶が目覚めつつあるからである。そのスターリンが弾劾されるのなら、どうして彼が定めた領土秩序を尊重することがあろうか？ ここに生じるのがまさしく民族紛争と領土紛争であり、その最も華々しい例が、ルーマニアとハンガリー間の紛争である。

だがあまり目立たないが、われわれにとっては当面純粋に心理的なものであれ、不吉な危険信号となりうる他の紛争も存在している。戦後ポーランドはヤルタの決定に対して領土上の不満を持ち、ルヴフ、ヴィルノ、グロドノ、ヴォウィン、中部リトアニア、ピンスク地方がわれわれから奪われたという反感を抱えてきたが、それと同じ程



ポーランド領土の変遷（伊東孝之「ポーランド現代史」山川出版社より）

度に、ベレストロイカの結果、これまで沈黙していた歴史というものをまったく知らなかった諸民族のナショナリズムが目覚めて、思いがけないことにポーランドに向けられて、戦後のポーランドはスターリンの産物であり、ポーランドがヤルタで失ったものはほんのわずかだと非難している。なぜならスヴァウキにしるピャウイストクにしる、プシェムシルにしるあるいはジェシユフですら、ポーランドに属するものではない。もう一方では、わかりきったことだが、オボレ、ヴロツワフ、シチェチン、オルシティンは、ドイツ人の心には、右であれ左であれドイツ人の心にさざったとげである。社会主義、ナショナリズムのいかにかわからず、ドイツ人ならだれでも、オドラ川とニサ川沿いのポーランド国境線はスターリンが引いたことを思い起こすだろうし、この地域のスラブ起源説はプロバガンダ的伝説と見なすだろう。

これは単に、わが国の経済的破産の結果だけでなく、反スターリン主義的思想変革の逆説的な結果でもある。ポーランドの領土とポーランドの共産主義政府を定めたのがスターリンならば、それでは……。

またそのために、純粋にポーランド系の若者たちの間でも、ポーランド人民共和国という国家への愛国心が揺らいでいる。また体制の経済的、組織的、技術的無能力のために、今日では国内の政

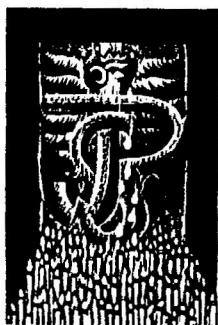
治闘争よりは、極端な体制不信に相応しい反対派が育っているが、その不信が直線的にも、最も有能で最も熟練した人たちに、しばしば亡命を決心させるに至っている。

40年たって初めて、東側ブロックにおけるポーランド状況の「心理的」安定性が、そこかしこで（まさしく同じ東側で）疑問視されるかもしれないという上記の過程の論証から、いかなる結論が導き出されるか？ 繰り返すが、かりにヨーロッパ分割があらゆる軍縮のお世辞にもかかわらず維持されていて、破滅的に進行しつつあるポーランドの国内状況がその隣人や強いられた同盟諸国にとってまったく苛立たしいものになっているとしたら、どうすればいいのか？ 予防と安定のための解決策は、私の見るところ1つだけだ。ここで、もう何年も前に私が述べた古い提案を引き合いに出さねばならない。ディレクタント的で、まるで現実味に欠けていて空想的だと、長いことの笑いになっていた提案である。

反対派とモスクワの対話

すなわち私が提案したのは、反対派の人々は、共産主義体制が気に入らなくとも、今日のヨーロッパの地政学的制約を理解すれば、モスクワの政府と独白に話し合うことができる、ということである。ポーランドの共産主義者たちの頭越しに。つまり、制度的イデオロギー的な問題や世界観の問題を、民族的、地政学的な問題から分離すること。すなわち、マルクス主義政党のヘゲモニーに依拠した共産主義的社会主义だけが、ポーランド人とロシア人（いわゆる共産主義的インターナショナルイズムの奇妙な造語である「ソビエト人」ではなく、まさしくロシア人たち）の唯一の接点とならないように、ということなのだ。

これまでポーランドでは、ソビエト連邦との政治的接触は、もっぱら共産主義政党が独占してきた。このような接触は、成果として採択される決議と同様に、当事者たる党の「上層部」が参加する秘密会議の形をとるか、またはワルシャワ条約加盟諸国の最高司令官たちの大々的に喧伝される会議のような形をとるか、そのような議会の経過



と決定も、実は秘密のままなのであった。

東側ブロックの国々の灰色の住民にとって明白だったのは、モスクワに指導された世界共産主義の政治戦術が、こうした秘密会議の枠内で決められること、各国の党の「トップ」だけがそうした決議に関与できることであった。このような状況では、ロシアの「統治者たち」と党の頭越しの、というよりむしろ党によって叙任されたリーダーたちの頭越しの合意という提案は、わが国では長い間、ふまじめな空想と見なされてきた——そのように考えたのはなにも共産主義者たちだけではなく、彼らのあきらめきった「被保護者たち」も同様だった。

だが情勢が変化した。スターリン＝ブレジネフ流の鉄の官僚政治は、ゴルバチョフのペレストロイカの打撃によって衰弱し、同時にブロックの結合力も弱体化している。バルト諸国や南方の国々は分離するとおどかしている。ワルシャワ条約が揺るがないとだれにわらう。こうした情勢にあつて、モスクワには、「ヤルタ」諸国の中に真の同盟者が必要であり、さまざまな党大会や秘密会議から、これまでのいわゆる同盟者たちが〔……〕〔1981年7月31日施行の出版興行統制法第3条第2項により削除〕であることがモスクワにはよくわかっているのだ。

ゴルバチョフは十分に聡明な人であるから、ソビエト人がポーランドではまるで好かれていない

ことをよく自覚しているだろう。とりわけ長年隠されてきたリッペントロップ＝モロトフ条約とかカティンの森の虐殺、あるいは当時のわが国の東部地域から何百万人ものポーランド人が強制移住させられたこと、などの歴史的事件の細部が、若者の間に流布したあとではなおさらのことだ。このような状況の中で「進歩的」モスクワは、いかなる共産主義インターナショナリズムも、ポーランドやハンガリーでは崩壊しつつある党エリートも、十分に信頼するに足る同盟者としての保証が提供できないことを理解している。そこで、反対派運動の波に揺れているこれらの国々で、国民の真の信頼を得ている、他の確かな保証人を捜さなければならぬ。

ここで、ロシアはポーランドで党以外の、共産主義者以外の、真に信頼するに足る同盟者を求めるようになるという私のかつての予言が現実的なものとなる道が出現した。この状況の最初の兆候はもう現れている。道をさし示したのはポーランドの教会で、高僧たちはすでに一度ならず、東方への意義深い巡礼を行った。世俗の、政治色の濃い著名人たちがさき群がり始めている。たとえば有名な映画監督アンジェイ・ワイダが招待されているが、彼は今日断固として反共産主義的で民族主義的人物なのである。ワレサ自身のモスクワ旅行の可能性も取り沙汰されている。いっぽうポーランドの新聞雑誌上では、ソビエト連邦に関する独自の非常に「修正主義的な」報告に事欠かない。

上述の論証から読者は容易に結論を下せるだろう、すなわち私はポーランド＝ロシア同盟の支持者である。今回は引用符なしの、いかなる制度的イデオロギー的共通性によらず、いかなる多国家的「インターナショナリズム」にもよらず、双方の具体的利益に基づく相互協定をよりどころとした同盟の支持者である。どのような利益であろうか？

ソ連との新しい関係

ポーランドは、1939—1940年に引き離された白国のかつての少数民族の敵意に脅かされている。彼らは今日やっと覚醒した攻撃的ナショナリズム



ヤルタ会談。左よりチャーチル、ルーズヴェルト、スターリン。

の時代を体験しつつある。ポーランドは、確かにヤルタとポツダムによってもたらされたとはいえず、自らの国家存亡のために不可欠な領土を手放したくない。それは、再三隣人たちを苛立たせ、人為的だ、確実に健全な経済への能力を欠いていると非難されている（ポーランドをベルサイユ条約の私生児と呼んだモロトフの有名な形容辞の名残？）。それでもなお愛国主義とヨーロッパにおける重要な役割の意識を失っていないポーランドは、改造されつつある新たなモスクワが同盟者であることを率直に理解し、そのことをはっきりと表現しなければならない。この同盟者は、ポーランドの領土的配置と、内政面の完全な主権の願望を理解しつつ、「プレジネフ・ドクトリン」の崩壊にもかかわらず、時折「スラブの」と定義されるが、われわれの場合には精神的に「ラテン」でもあるこのヨーロッパ東部の、安定の保証となっている。ではモスクワにとっての利益は？ 一目瞭然である。なぜならポーランドはドイツへの通過地域であるが、通過地域は安定し、一義的で、平穏でなければならない。ドイツ帝国とその共産化した断片と、ソビエト連邦の関係は、なお当分の間ヨーロッパの均衡の試金石、礎石として留まるであろう。何よりもユーラシアの大国であるソビエトに関心を持っている今日のアメリカ人は、そのことを良く理解している。そこが、かのポーランドを通過しているクライベダ＝ロストク街道

の危険地帯であることは、ロシア人たちにもわかっている。

すなわちどのような制度的、イデオロギ的條件も伴わない、したがって共産主義者抜きの双方の同盟協定は〔……〕〔1981年7月31日施行の出版興行統制法第3条第2項により削除〕。この種のポーランド＝ロシア〔ポーランド＝ソ連ではない〕関係の形成はすでに可能だろうか。それともまたしても実現するに十分な担保に欠けた予言なのだろうか。

ゴルバチョフはその発言の1つで次のように確認している。ブロック内のそれぞれの国の独自の改革運動にはまったく反対しない。戦後の歴史的「合意」への裏切りと見なすのは、次の2つの行為、すなわち a) ワルシャワ条約加盟国の軍事体制からの離脱、b) 社会主義の放棄、の2点だけである。

a) に関しては、私の意見では、ワルシャワで言われているように「問題はない」。われわれがワルシャワ条約から脱退しないことは、ヨーロッパの地政学からきている。それを裏側から保証しているのは、すでに長年いわゆる「過渡期的」状況(あたうるかぎり長く続いている過渡期的状況)を理解し、ほとんど受け入れている資本主義的西側である。もっとも、双方の超大国の今日の軍縮の傾向を考えれば、小国を包括している軍事条約の問題は、ほとんど毒を失っている。2番目の、社会主義の問題の方が厄介で難しい。

ここで次なる瘤、第2次世界大戦とヤルタ会談がわれわれに残していったもうひとつの瘤に移ろう。第1の瘤は、ポーランドの国家主権喪失だった。第2のそれは、マルクス主義的全体主義的体制、今日では現実的社会主义と呼ばれている体制の段階的押し付けである。

「社会主義の清算」

ここでふたたび私の予言を、何年も前から述べてきた要領を参考にしなければならない。それはこういう内容だった。ポーランド政治の目標は「社会主義の清算」でなければならない。名称を変えことなく、ソビエト連邦の暗黙の了承のもとに。



ゴルバチョフ議長

かつては空想的な夢想と言われたこの要領も、今日ではまったく現実的なものとなり、共産主義政府のメンバーたちの会話の中でさえ考慮されるようになってきている。ひょっとするとさらに進んで、かの「扉号」である社会主義という言葉そのものも、捨てることができはしないか？ そもそも言葉が問題なのか、それとも中身が問題なのか？ それに今日、この多義的で、シンボル、恐喝、覆いとして用いられている言葉、ソビエト連邦においてはあからさまに宗教的ドグマであるこの言葉の使用に、一体どんな意味があるというのだろうか？

私が繰り返し述べたことを、ここで想起しなければならない。社会主義はいかなる形態をとりとも、ポーランドの歴史においてはつねに異様に脆弱であり、マルクス主義的プロレタリアートの社会主義は、士族と農民からなる農業共和国の歴史にはまったく適応しなかった。第2次世界大戦後もポーランドにはいかなる社会主義革命も存在しなかった。〔……〕〔1981年7月31日施行の出版興行統制法第6条第2項により削除〕。

1948年から56年のポーランドにおけるマルクス＝レーニン＝スターリン主義建設の人為的実験時代の結果は、今日のポーランドの危機、後進性、そして破産に向けた基盤の設定だった。かの基盤の要素となったのは、1) 人々を村から引っ張り出して、労働者階級を形成するという理念的政治

的見地のもとに構成された、巨大だが不確かな産業基盤（炭鉱、製鉄所、機械産業）のためめ建設と拡張。2) でっち上げの「階級敵」との闘争。私営の手工業、商業、製造、および富農の残滓がそうみなされた。農村の集団化闘争は結局勝利しなかったものの、ポーランドにとって高くついたし、失われた大量の活力は今なお高くついている。3) あらゆる「非生産的な」、だが将来の発展した近代的国家の成功にとって決定的役割を担うはずであった多種多様な単位と社会的イニシアチブの破壊。つまり、個人経営のサービス業、零細な商売、修理業、個人の建設業者、協同組合等々。すべてが集中的大規模生産と巨大建設事業を中心とした投資理念のために破壊された。4) あらゆる政治的反対派、および異なったイデオロギーとの闘争、とりわけカトリック教会との、無意味な、幸いにも成功しなかった闘争。5) 大量の新たな役人階級、党官僚階級の創出。彼らが、中央計画の指示にしたがってすべてを管理することになる。

たいていの場合は素性の知れぬおもに政治家たち、つまりは素人によって作成される長期計画の硬直性と現実生活への不適合性は、ポーランドに多大の損失と不幸をもたらした。そもそも現実生活の可変性や豊さを、まるでベンチみたいに締めつけようとする中央計画の思想は、共産主義者たちが考えだした最悪のものである。新たな役人階級のいわゆる計画性なるもの全能性は、生産手段の私的所有撲滅というマルクス主義的要請の延長線上にある。生産が共有のものであるならば、それはつまり組織的には誰のものでもなく、した

がってその管理にたずさわる者の招集が必要となり、党のイデオロギー的少数独裁政治がその者たちを任命する。しかるにいったん任命された管理者階級は、ボリプのように増殖し、それ自体が目的となり、有名なパーキンソンの法則にしたがって、すべてを抑制する高くつく代物となる。たぶんこれが、共産主義においても有効な、社会的自然発生性に関する唯一の西側の法則である。

もちろんポーランドでは、万事が計画にしたがって進行したわけではない。社会の上からの全体主義化、すなわち社会のソビエト化はまた（特にみずからの使命を信じている役人階級の心理における疑いのない成果以外に）、国民的、社会的障害に遭遇する。1956年、1970年、1980年がやってくる。ゴムウカは農民を救済し、教会への締めつけを少し緩め、放縦な投資を抑制しようと試み（失敗に終わったが）、モスクワとの関係を部分的に調整するが、たくさんの国際的チャンスを逃がした。ギエレクはポーランド流のネップを予告して、巨大な額の外国クレジットを受け取り（どうしてなのかは知ることができない、外国語で喋っているから!）、それを県書記同志たちが、ますます大規模な、ますます疑わしい投資のために我勝ちに奪い合い、またしても農業が顧みられない。かくして、外国製の強烈な注射にもかかわらず（ひょっとしたらそれが原因で）、経済危機は非常にはっきりした、手酷いものとなり、共産主義の中で真の奇跡が起こる。すなわち自然発生的な、下からの、まもなく政府もしぶしぶ認めざるをえなくなる「連帯」が、即座に一千万人を組織した。

【以下次号】



【2頁から続く】

以上の者は半分から3分の1に減刑。●英政府、ポーランド援助のための2500万ポンド基金を発足させる。

11月17日 内務省スポークスマン、現状では警官労組結成は認められないと語る。●KGBの前身チェッカー（秘密警察）生みの親であったポーランド出身のジェルジンスキーの銅像の取り壊しがワルシャワで行われる。

11月18日 マゾヴィエツキ首相はポーランド訪問中のドロールEC議長、デュマ仏外相と会談、ECがポーランドの債務返済延期に協力してくれるよう要請。●「連帯」民主選挙誘導派（反ワレサ派）の全国会議。ヤウォルスキは、「連帯」最上層部は組合ではなく政府の利益を代表していると発言。●パリで開かれたEC緊急首脳会議で東欧支援の原則と方法が協議され、IMF融資までハンガリーにつなぎ資金、ポーランド経済安定基金へECから資金提出を行うことで合意。●米上院、対ポーランド、ハンガリー-経済援助（3年間で9億3800万ドル）法案を可決。

11月19日 ポーランド・ラジオは、マゾヴィエツキ首相の上院就労呼びかけの結果採掘量が増加したと報じる。

11月21日 チェコで「市民フォーラム」結成、「連帯」ははじめ東欧の民主化勢力へメッセージを送る。

11月22日 ノヴァタのレーニン像が放火される。●スイス政府、ポーランドとハンガリーに3年間で1億5000万ドルの融資を行うことを決定。●ウウォツワエクの「連帯」、経済向上のため特別に土曜も働くよう労働者に要請。

11月23日 マゾヴィエツキ首相、3日間の予定で初の訪ソ。●下院はORMO（警察協力義勇隊）の解体を可決。同時に刑法も改正、一部の罪状に対し認められていた財産没収が廃止され、91年元日以降、裁判済みの勾留者は警察に拘留されるのではなく司法省管轄下の審理刑務所に入れられることに。●ラコフスキ第一書記、統一労働者党にはもはや効果的な政治闘争を行う力はないと述べる。●東独、ポーランド人による東独物資の西側への持ち出しと販売を防ぐため、24日から税関検査を強化と発表。通過ビザのポーランド人は通過用道路・列車を離れることを禁止される。

11月24日 マゾヴィエツキ首相、ルイシコフ・ソ連首相と会談、対ソ債務の再構成を論議。次いでゴルバチョフ議長と会談。ゴルバチョフはマゾヴィエツキ政権への全面的協力姿勢を確認。また両首脳は、両独統一

に反対する意思を表明。●マゾヴィエツキ首相はサハロフ博士を含む改革派知識人約100人とも会談。●ブリュッセルで開かれた東欧民主化支援西側24カ国会議、ポーランドに対する経済安定化基金10億ドルの供与、追加食糧援助、経営・訓練の技術供与、金融・財政の構造調整での協力などで合意。●ワルシャワで独立学生連盟（N.Z.S）が大会。

11月25日 マゾヴィエツキ=ルイシコフ第2回会談、マゾヴィエツキ首相はこの後記者会見、ソ連首脳部の理解が得られ、彼らと共通点を見出せたと語る。●チエコでヤケシュ書記長解任、改革路線へ。

11月26日 マゾヴィエツキ首相、カティンでミサ参列。11月27日 ポーランド=ソ連共同コミュニケ。両国同盟関係の維持・発展を確認。しかしカティン事件をはじめとする「歴史の空白」の問題については直接言及せず。●イスラエルのペレス外相がポーランド訪問、スクビシェフスキ外相、ヤルゼルスキ大統領とそれぞれ会談。両国の正式な外交関係が90年第1四半期にも樹立されるだろうと語る。●コル西独首相、両独統一の段階的実現案を提示。

11月28日 ペレス外相、マゾヴィエツキ首相と会談。両独統一は早急に行われるべきでないという点で一致。●コル西独首相のドイツ統一案に対し、ポーランド外務相は独=ポーランド国境不可侵を訴える。●ヤイター農務長官が米政界首脳からなる米国の高官ミッションがポーランド訪問。ポーランド経済を視察し援助方法等を検討する。●クローン労働者、スト関連法案を説明。ストは全従業員半数以上の賛成を得たのち2週間たって初めて実行してよい、スト労働者の賃金は企業でなく組合が払う、など。●韓国大使館がワルシャワに開設。

11月29日 ワレサ、労組の招きで訪英。●米大統領、対ポーランド8億5000万ドル援助法に署名。●英国、対ポーランド援助の増額を発表。●ノヴァタのレーニン像を壊そうとしたデモ隊に警官が放水。像撤去を国会で取り上げるとの「連帯」議員の説得でデモはおさまる。

11月30日 ポーランド政府5兆ズウォティの国債発行。

12月1日 ワレサ、英国で対ポーランド投資を訴える。

12月2日 訪伊中のゴルバチョフ議長、ローマ法王と会談。ソ連と法王庁の外交関係樹立を合意。●マルタで米ソ首脳会談。●ワレサ訪英団、サッチャー英首相と昼食会。

12月3日 マルタ会談、冷戦の終結を宣言。
12月4日 モスクワでワルシャワ条約機構首脳会議、「プラハの春」介入を公式謝罪。●ズウォティが1ドル4200ズウォティに切り下げ。
12月6日 またもデモ隊がノヴァファクのレーニン像に石、ペンキ、火炎ビン等を投げつける。警察が催涙ガスと放水で対応。
12月7日 コール西独首相の「両独統一項目」についてスクピシェフスキ外相は国境問題が明記されていないと懸念を表明。
12月8日 数カ所の刑務所で恩赦範囲拡大を求める囚人の暴動、囚人7人が死亡。ベントコフスキ法相はTVで恩赦範囲決定の変更はないと発言。●コール西独首相、東独とポーランドの国境線を初めて公式に認める。
12月9日 刑務所暴動は一部で実力で鎮圧されたものの他では占拠ストの形で続行。
12月10日 ノヴァファクのレーニン像が撤去される。地区当局は像の移転先を検討中。
12月11日 キシチャク内相、強盗などの犯罪の増加に懸念を表明。●ハンガリー税関当局、東欧諸国民に対する関税規制を強化。●ズウォティ、1ドル5000ズウォティに切り下げ。
12月12日 ポーランド訪問を終えたIMF理事長、ポーランドとIMFは西側援助の前提条件となる緊縮財政計画の大筋で合意に達したと語る。●ワレサは、大規模な経済改革を遂行するために政府に非常権限を与えることを提唱。
12月13日 ブリュッセルで開かれた西側先進24カ国閣僚会議、30億ドル相当の対ポーランド・ハンガリー援助を採択。●戒厳令8周年。全国各地の都市で過激なデモ隊が騒乱を起こす。●ニェザビトフスカ政府報道官、前日のワレサ提言に関し、政府には非常権限を求める意向はないと記者会見。●政府、失業の存在と失業者の権利義務の制限を認める雇用法草案を認可。
12月14日 政府、来年1月1日導入予定の緊縮予算案を承認。来年の実質歳入の20%減、失業者40万人を予想。目的は市場経済を創出しズウォティの交換性を確立、これによりIMFとの協定の基盤を作ること。補助金は予算の31%から14%へと削減。
12月16日 議会諸会派、12日のワレサ提案を拒否。
12月17日 バルツェロウィチ蔵相、政府経済計画を下院に提出。●「農民連帯」大会で議長選挙、前議長シリシュが落選しG・ヤノフスキが選出される。ヤノフ

スキは政府に農業補助を訴える。●警官労組設立準備委員会が設立される。●ワレサとミフニクはA・サハロフ博士の葬儀出席のためモスクワへ向かう。
12月18日 ズウォティの公定レートが1ドル=6000ズウォティへ切り下げ。
12月19日 ポーランドとIMFの経済改革に関する同意書が完成、数日以内に調印の見通し。●下院、ルーマニアの虐殺事件を非難する決議を全員一致で採択。
12月21日 ワルシャワのルーマニア大使館前で学生がビケ。●「農民連帯」新議長、政府を支持するが、農業政策には不満があると述べる。一方、17日までの大会でより強硬派的な路線が採択されたことを理由に、シマンデルスキ・スボクスマンが辞任。
12月22日 ルーマニアでチャウシェスク政権が崩壊。●グレンプ枢機卿を議長に全国基金評議会が設立される。他のメンバーはワレサ、市民議会クラブ議長B・ゲレメク、上下両院議長ほか。
12月23日 ポーランドとIMF、合意書に調印。7億ドル以上の予備借款がポーランドに。●閣僚評議会、ジャルノヴィエツ原発建設を経済的理由で中止。
12月25日 ポーランドからルーマニアへ緊急援助第1便が送られる。
12月26日 マゾヴィエツキ首相、ルーマニアのロマン新首相に支援を約束するメッセージを送る。●恩赦によりこの日までに1万6000人が釈放。
12月27日 全国でルーマニア支援・救済運動が活発に。
12月28日 市民議会クラブの招きで前日からポーランド訪問中のリトアニアの民族組織「サユティス」代表団、ゲレメクらと会談。●エルブロンク県知事に「連帯」系候補が当選。
12月29日 下院、政府経済改革計画を承認。同時に憲法を改正、党の指導的役割と社会主義に言及した部分を削除、国名をポーランド人民共和国からポーランド共和国に変更、国章の白鷲も戦前どおり王冠を戴いた姿に戻される。採決後は長い拍手が続き、議員たちは起立して国歌を歌った。●ヤルゼルスキ大統領、マゾヴィエツキ首相、ワレサ委員長はそれぞれチェコの新大統領に選出されたヴァツラフ・ハヴェルに祝賀メッセージを送る。●グダンスクの内務省県本部前で、本部長解任を求める警官グループ（警官労組設立準備委員会の人々）がビケ。
12月30日 前日下院を通った憲法改正案が上院でも可決。●1月1日からズウォティの対ドル公定レートが9500ズウォティへ切り下げ。●1月1日からの値上げ

が発表される。石炭小売価格7倍、電気、暖房、給湯、ガス代は約400%。他の価格にも波及が予想される。報道によればこれでもなお生産コストの方が高いという。また1回乗車用の鉄道料金は250%(2月1日からはシーズン・チケットも同率値上げ)、ガソリン2倍、市内交通、電話、郵便も100%、国際郵便と国際電話は3倍に。

1990年

1月2日 西側先進国グループは、スウォエティの交換性確立を助ける10億ドル相当の準備基金を設立。●ポーランドのマスメディアによれば、失業手当は最初の3ヶ月は失職時賃金の70%、次の半年は50%、以降は40%。

1月3日 「農民連帯」指導部が会合、政府経済計画は農民の立場からは「極めて心配の多い」ものと受け取られていると述べている。

1月4日 クーロン労相が失業者数の公式統計40万人は推定にすぎず、IMFの見積りでは100万人(労働人口の5.6%)だと語ったと伝えられる。●ワレサ、83年のノーベル平和賞の賞金20万ドルを政府の経済政策支援基金に贈る。●シヴィツキ国防相はTVインタビューで軍備削減と経費削減状況を詳述。●ポーランド訪問中のクラウス・チュコ蔵相、コメコンは存在理由がないと発言。

1月5日 ニェザピトフスカ政府報道官によれば、大蔵・外国貿易両省がグダンスク造船所閉鎖計画を放棄、かわりに株式会社化して雇用者と外国資本に株を売却する方針を立てる。

1月6日 統一労働者党中央委、月末の党大会へ向け準備会議。党の解散と新しい左翼政党結成を承認。また民主集中制とプロレタリアート独裁の原則を放棄する政策文書を探択。●日本政府、対ポーランド・ハンガリー5億ドル援助と、輸出入銀行による3年間の低利融資を決定。海部首相訪欧時に発表の予定。

1月9日 ソフィアでコメコン年次総会。マゾヴィエツキ首相は、現在のコメコンの中央集権メカニズムは不適当として、現実的な人幅改革が必要と発言。チュコは最も急激な改革を主張。●グダンスクで「連帯」全国委員会幹部会。政府の経済私有化提案を検討。●ポズナン近郊で警官労組設立大会。全県および4つの警官訓練学校から267人の代表が。

1月10日 警官労組大会終了。国家への忠誠を宣言、議長にR・フラを選出し、以下の要求を掲げる。①内務省その他に関係する法案の作成への参加 ②内務省幹部の一部の解職 ③組合活動や政治的信条を理由とした警官解雇を定めた法律の廃止 ④組合に事務所、電話、印刷機の所有を認めること。●コメコン総会終了。外国貿易の中央指令制を脱し、交換可能通貨を媒介とした市場経済システムへ移行する点では合意したが、その程度や変革速度には合意がみられず。改革のための特別委員会の設置を決定。

1月11日 ポーランド訪問中のティンストビール・チュコスロヴァキア外相、マゾヴィエツキ首相、ヤルゼルスキ大統領らと会談。●シフェンチツキ貿易相、将来の完全加盟を含んだECとの関係強化の意向を表明。●農民連帯のヤンコフスキ委員長、政府の農業政策に不満を表明。 [訳編：高橋初子]

編 集 後 記

※昨年暮にかけて、最後まで残っていたルーマニアのチャウシェスク政権があったという間に崩壊し、これでワルシャワ条約機構加盟国のすべてが一応新体制に移行しました。

☆ポーランドでは、1月末、統一労働者党の解散大会が開かれ、「社会民主党」への衣替えが試みられましたが、あえなく3分解。主流を主張する「ポーランド社会民主主義」は結党後半月たっても党員はやっと5,000人と報じられています。

☆東欧激動のひとつのきっかけとなったベレストロ

イカのソ連でも「党の指導的役割」の放棄の方向が最終的に決まりました。

☆このようなソ連・東欧の激動の意味を問う議論がさかんです。さすがに最近では「社会主義の敗北・資本主義の勝利」といった短絡的な議論は影をひそめたようですが、本格的な議論はまだこれからという感じがします。

☆「連帯」の第2回全国大会が4月19～24日、グダンスクで開催されることが最終的に決まったようです。われわれとしても対応を考えたいと思います。

☆雑事に紛れて発行が遅れ、ご迷惑をおかけしました。末筆ながら本年もよろしく。1990・2・23 み

●国際的知のネットワークをめざす●



大村書店

諸君の大統領 われらの首相

ポーランド

(定価 三三〇〇円 + 税六九円)

「連帯」政権を

読み解く

ポーランド資料センター 編訳

エルネスト・ラクラウ・シャントル・ムフ

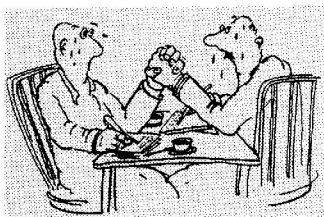
「ゲモニー」と社会主義戦略

山崎カヲル訳 (ポストマルクス主義論考)

「ニューレフトレビュー」誌で展開されている論争
の発売となった注目の書 (定価二〇〇円)

トロッキー 我々の政治的任務

藤井一行 / 左近 監訳 スターリン官僚主義批判にひとつ
て必読のトロッキー思想の原典 (定価二〇〇円)



東京都板橋区熊野町8-2(ナカタビル2F) 電話 03 573-8711 編訳 東京 4 487922 (登録所) 東京都文京区本町3 21-11

発行所・ポーランド資料センター

Center for Polish Research

%Kazukuni Bldg. 3F 2-10-5 Misakicho Chiyoda-ku Tokyo 101

定価 400円・年間定期購読料 4600円 (送料共)

〒101 東京都千代田区三崎町 2-10-5 一國ビル 3F
電話 03-261-2585 郵便振替 東京 2-81069

ポーランド情報一九九〇年二月号 連載九六号
一九八四年一月一〇日第一種郵便物認可